

さまざまな授業・公開講座を展開

特殊講義、学術講演会、公開講座…。キャンパスで展開されているさまざまな授業や講座をご紹介します。

企業と消費者との協働のあり方学ぶ

ACAP寄付講座
特殊講義(CS経営革新特論)



▲講義する鶴田俊正会長

顧客満足型のマーケティング活動や企業と消費者との協働のあり方に焦点をあて企業の経営革新について学習する、商学部のACAP寄付講座「特殊講義(CS経営革新特論)」(担当・見目洋子助教授)が行われている。

4月23日には、ACAP((社)消費者関連専門家会議)の鶴田俊正会長(本学名誉教授)と芝原純理事長が基調講話を行った。

鶴田会長は「企業成長と消費者」と題して講義。1980年代を境に市場の競争状態が変わり、同時に企業が積極的に消費者対策に取り組むようになった。消費者運動が経済社会の中で市民権を確保したのは、90年代に入ってからである—と、消費者を巡る市場環境の変化を戦後の日本経済のあゆみを交えながら解説。さらに、真の消費者主権を確立していくための課題にも言及した。続いて芝原理事長は、消費者と企業のより良い関係を考え、共生を目指すための組織であるACAPの活動と現代的意義について講義。学生約260人は熱心に傾聴していた。

同講座では今後メーカー、流通・サービス、情報・通信、金融・保険など多業種の企業から消費者対応についてのさまざまな活動について学ぶ。

ビジネス第一線の事例を学ぶ

日本ユニシス 島田社長昨年に続き講義



▲講演する島田社長(4月26日)

経営学部の企業による提供講座が3年目を迎え、今年度は「日本商品振興協会(JCFIA)」と「日本内部監査協会」を加えた全7科目(後期科目を含む)が展開されている。業界を代表するビジネスマンたちが最新の情報を提供し、学生たちにとっては企業経営の実情と、経営管理論、経営組織論、会計学など授業で学んだ知識を比較する貴重な講義となっている。

月曜日5時限に開講されている日本ユニシス(株)提供の「情報管理特殊講義」では、IT分野の代表的企業である

同社の経営戦略、情報サービス、会社組織などについて各部署の社員が講演。

4月26日に最初の講義を行った島田精一社長は、「ユビキタス社会を迎えて、経営トップ自らがITとビジネスを一体化させる必要がある。テレマティクス・ビジネスへの取り組

みが重要になる」と論じた。

10回の講義終了後の7月26日(金)には、同社の見学会も行なわれる予定になっている。

スピノフ形態のベンチャー企業

大学院経済学研究科公開講座 <あずさ監査法人の冠講座>



大学院経済学研究科修士課程(池本正純教授)で展開している「ベンチャー企業家育成」(あずさ監査法人の冠講座)の講義が、公開講座として6月7日神田キャンパスで開かれた。=写真

「スピノフ形態のベンチャー起業について」をテーマに、同法人企業公開部マネージャーで公認会計士の坂井知倫氏が講演。

スピノフ形態とは、大企業に眠っているシーズや技術開発テーマ、人材をベンチャーという形で外部に分離。子会社ではなく独立した組織として、親元企業との連携・支援で技術開発を行う形態だ。世界との競争力を高める極めて有効な手段として、日本でも多くの企業が発足させている。

中米コスタリカの平和外交戦略に学ぶ

法学部学術講演会



▲講演する猪又忠徳駐コスタリカ大使

法学部学術講演会が5月14日、神田キャンパスで開催され、「多数国間関係における国際公共財の形成—コスタリカの非武装中立外交—」について、駐コスタリカ日本大使の猪又忠徳氏が約1時間半にわたって講演した。司会・進行は石川一雄教授が務めた。

世界で唯一と言える「非武装永世中立国」である中米の小国コスタリカ。1949年、新憲法の公布により、軍隊を廃止。その後も戦争を繰り返す他の中米諸国や、それに介入しようとする米国に対し、中立的立場を貫き、83年、モンヘ大統領が「永久

非武装中立宣言」をし、これを受け継いだ後任大統領のアリアス氏が中米和平の道筋をつくり、87年にノーベル平和賞を受賞。平和外交を継続している。

2002年から同国大使を務める猪又氏は、国際環境行政の専門家でもあり、同国が成熟した民主主義体制を堅持しながら、「国の安全より、人の安全」という安全保障の概念を軸に、多数国間機構を重視し、環境、教育、貧困問題などに関わる国際公共財の形成に積極的に協力している現状を解説した。学生のほか一般からの聴講者も目立ち、約200人が傾聴していた。

大学院法学研究所で集中授業

日本行政書士会連合会に協力

大学院法学研究科(古川純研究科長)は、行政書士の質向上と司法分野への参入を目的とする「司法研修」を進めている日本行政書士会連合会(宮内一三会長)と覚書を取り交わし、5月から土曜日に集中授業を行っている。

約90人の行政書士が科目等履修生と



▲講演する家永助教授

ス7号館(大学院棟)で受講。単位の認定も行われる。

して、法律学応用特論(家事審判法、民法の親族・相続＝木幡文徳教授、家永登助教授担当)、同(行政救済法＝白藤博行教授担当)を神田キャンパ

【ニュース専修2004年6月号5面】

私のお勧めBOOKS

『宇田川心中』小林恭二著

キーワードは「愛」「悲恋」
時空を超えた実験小説

三島賞作家で本学教授の小林恭二氏の新著が話題を集めている。

小林氏は今年春から、文学部の日本文学文化専攻の教授を務めているが、この『宇田川心中』は一昨年从去年秋まで「読売新聞」に連載された大作だ。「朝日新聞」と「読売新聞」が、小林氏のロングインタビューを載せ、書評も新聞雑誌をにぎわしている。大きな文学賞を取りそうな気配だし、この小説はミュージカルとして上演されるそうなので、話題は続きそうだ。

小説の舞台は、渋谷駅前の宇田川町あたり。西武やパルコや東急ハンズのある賑やかな一画だ。駅前の交差点ですれ違った少年と少女が、一瞬にして恋に落ちる、というのがプロローグだが、じつはこの後に、いろいろな仕掛けが隠されている。キーワードは「愛」あるいは「悲恋」。同じ渋谷界隈を舞台に、時代は150年前の江戸時代にタイムスリップし、さらに800年前の鎌倉時代に移行する。同じような若い男女の実らない愛が、それぞれの時代環境を背景に、ホットにあるいは悲しく、リズム感のある文章でつづられていく。

もう一つの大きな仕掛けは、歌舞伎作者の河竹黙阿弥が登場することだ。恋ゆえに悪に手を染める少年の心理や、恋の邪魔をする悪人たちの所業などは、黙阿弥の芝居と共通する。場面の設定も黙阿弥っぽい。つまり、この小説はじつは黙阿弥が書いているのだ、という「隠れ作者」が設定されている。

時々、作家が文中に出てきて注釈をはさむのも、江戸時代の人情本などにはよくある手法だ。作家高橋源一郎へのからかいも、江戸の戯作の味だ。

つまりこの小説は、古典、特に歌舞伎の方法を自由自在に生かした現代小説だ、ということになる。小林氏ならではの方法的実験だが、新聞連載ということもあって、じつに読みやすい。読むとやめられなくなる面白さだ。[中央公論新社・本体1900円]

(文学部教授・柘植光彦)

【ニュース専修2004年6月号5面】